

出張先で地震に遭遇して感じたこと

工学部職員組合 大西 孝

筆者は2018年9月5日(水)から7日(金)にかけて、北海道の函館で行われていた学会に出席するために、5日に函館に着き、6日(木)未明に「北海道胆振(いぶり)東部地震」に見舞われました。今年は各地で風水害や地震が相次いでいますが、自身が住んでいる地域ではなく、出張先で災害に遭うという経験をすることになりました。万が一、読者の皆さんが出張先で災害に遭われた際のお役に立てばと思い、出張先での経験を振り返ってみたいと思います。

9月6日(地震発生当日)

筆者は9月5日の深夜に函館に着きました。台風21号の影響で飛行機の搭乗を1日遅らせたものの、5日の昼間はJR北海道の各線が台風の影響で運休したからです。函館のホテルに23時頃に入り、「明日から学会へ行くぞ!」と寝付いてほどなく、大きな揺れに襲われました。函館は震度5弱だったようで、建物が崩れそうな恐怖は感じませんでしたが、瞬時に停電し、客室の非常灯が点きました。

まず確認したのは津波の有無でした。函館駅周辺のホテルは海が近く、万が一津波が来たらどうしようと思いましたが、テレビは停電で見られません。そこでインターネットに接続して、地震速報で津波の心配はないこと確認し、周りも真っ暗で何もできないので、ひとまず眠りにつきました。そのときは、停電も翌朝には復旧するだろうという程度の考えでした。

朝、起きててもテレビや室内灯が点きません。まだ停電しているのかと思い、インターネットで情報収集すると、全道が停電しているというので、これは尋常ではないと思いました。まずは所属先の学科長と研究室、自然科学研究科の事務(出張担当)へ状況をメールで報告しました。報告内容は「身の安全は確保できている」「いつ停電が復旧するか分からないから、今後の連絡は極力控える」というものでした。一番ありがたかったのは、出張担当の方から「気をつけて帰ってきてください。こういった事態ですので帰路の交通機関の変更は、領収書を取っておいてもらえれば、問題ないと思います」という旨の返信でした。そうこうしているうちに、インターネットの接続も怪しくなってきました。バッテリーで稼働してい



た通信会社の基地局が、だんだんと動かなくなったようです。函館空港からの飛行機は飛んでいるとの情報が入ったので、ここにも仕方がないと空港へ行くことにしました。青森へのフェリーも動いていましたが、港では多くの人が並び、いつ乗れるかわからないということでした。なお、フェリーに乗った人へ後日聞いたところ、港で長時間待った後、青森へ深夜に着き、7日の朝まで青森駅の周辺で野宿せざるを得ず、非常事態とはいえ大変な目に遭ったとのことでした。

昼頃にホテルを出て、空港へバスで向かいました。空港は最低限の電気が確保され、航空会社のカウンターは通常と比べると半分程度しか空いていませんでしたが、飛行機は一部の便を除いて離着陸しており、キャンセル待ちに並びました。筆者は運賃が安い7日夜の新千歳空港からのフライトを予約しており、函館空港からの搭乗券を持っておらず、キャンセル待ちの列に並んだ人の多くも同じ状況で、一様に不安な顔をしていました。自然と列の前後で言葉を交わすようになり、心細さを紛らわすことができました。約2時間並び、最終の羽田行きの空席待ち整理券をもらえましたが、最終便が飛び立つ19時半過ぎまで4時間程度、時間をつぶさないといけません。夕方には、空港でも携帯電話やWiFiの通信は途絶しました。

結果としてキャンセル待ちをしていた最終便には乗れませんでした。今夜は函館から出ることができませんが、ホテルへ戻っても水、電気、通信、全てがありません。仕方がないので、他大学の顔見知りの先生と、どこに行ったら良いか案内所で尋ねたところ、近くの上湯川(かみゆのかわ)小学校が避難所になっていると教えてくれました。タクシーで避難所へ行くと、空港で取り残された乗客が30名程度避難していました。小型の発電機で投光器が点けられ、最低限の灯が確保されており、これだけでもずいぶん心強く感じたものです。ここでは現地の方に大変良くしていただき、食料(缶入りのパン)や水、毛布の提供を受けました。また、ここは水道も出るので、トイレの心配もなく、ホテルに戻るよりは安心だろうと思いました。北海道ゆえに、避難所が暑くなかったのも幸いでした。



9月7日(地震発生の翌日)

地震の翌日もキャンセル待ちをするために7時前に避難所を出て、空港まで約20分歩きました。避難所にはまだ電気が来ていませんでしたが、空港周辺は復旧していました。すでに約70名の人々が並んでいましたが、電気の復旧により航空会社が平常通り営

業できたため、行列は昨日と比べるとずいぶん早く進み、1 時間ほどで空席待ち整理券を受けることができました。今日は羽田、中部、伊丹、全ての便のキャンセル待ちを申し込みました。

空席待ち整理券をもらって少し落ち着くと、空腹を覚えました。昨日閉店していたラーメン屋を覗くと、今日は営業していて、温かい食事ができました。地震発生から 30 時間ぶりくらいに、温かいものを口にしたいと思います。カウンター近くで待機していると、最初の羽田行きは乗れませんでした。午後 1 時過ぎの中部行きに、最後の最後で番号が呼ばれ、飛行機へ走りました。中部国際空港には午後 2 時半過ぎに着陸し、正直ほっとしました。同時に、ライフラインに支えられた文明社会は大変便利ですが、脆くも崩れてしまうと、いかに我々は無力であるかということも感じました。



2 日間の経験を振り返って

今回の地震はご存知の通り、厚真(あつま)町を中心に土砂崩れ等で多くの人命が失われるとともに、北海道全体が停電(ブラックアウト)するという、未曾有の災害でした。函館は地震による直接的な被害はほとんどなかったようですが、それでも地震発生当日の市内は全域で停電、コンビニの食料品は品薄、ATM も一部の地元の銀行を除き稼働しないという状況でした。今回の地震を通して、次のような教訓を得ました。

・まずは人のいるところに集まる

人が集まる場所では、いろいろな情報が入ります。さらに主要な機関であれば最低限の電気は確保されていますし、秩序も保たれています。まず空港へ行き、その後、避難所に行きましたが、身の危険を覚えることはありませんでした。また、人が集まる場所では自然と、人はお互いに話すものです。少しでも不安な気持ちを解消するには、積極的に他の人と話すのも大変有効だと感じました。また、困ったときはためらわずに避難所に行くのも一つの対策だと感じました。一人でいるよりも避難所にいると安心感が全く違います。ただし、大規模な災害で長期にわたり避難所で生活すると、疲労がものすごく溜まるのではないかと感じました。



・情報収集と連絡は早目に

地震発生直後に津波の有無を確認しましたが、災害の状況を確認することが重要です。テレビが使えないということも考慮しておく必要があります。また、電気が長時間にわたって復旧しないと、やがて通信も途絶してしまいます。そのため、今回の地震では、地震発生当日の朝に詳細な情報を収集し、すぐに帰れそうにないと分かった時点で、所属先へ最低限の連絡をしておきました。電池で動く携帯ラジオは持っていませんでしたが、これも持っておくと情報収集に有効だろうと思います。



・最低限の食料と現金があると安心

筆者はホテルに泊まる際、素泊まりを選ぶので、常に菓子パンを 2、3 個持ち歩いています。また、水とお茶のペットボトルも、日数分くらい(今回は水 1 本、お茶 3 本)はカバンに入れていました。これが大いに役立ち、市内のコンビニで食料がなくなっても、しばらくは大丈夫だろうという安心感がありました。真水はコンタクトレンズを洗ったり、体をふいたりするのにも役立ちます。水のペットボトルも 1 本持っておくと安心です。さらに、停電になるとクレジットカードは使えませんが、ATM が動かないので現金も引き出せません。ある程度、現金を手元に置いておいたほうが良いです。

終わりに

今回のような経験は二度としたくないものですが、昨今の災害の状況を鑑みると、いつ、どこで、いかなる災害に見舞われるかわからないという不安をお持ちの方も多いことと思います。不幸にも出張先で災害に直面した際に、筆者の経験がお役に立てばと思います。



最後に、北海道の早期の復興を願います。遠く岡山にいと直接できることは限られていますが、現地が落ち着きを取り戻した際には観光で訪れるのも一つの復興支援になるでしょうし、北海道の名産品を購入するといったことも経済の振興に役立つかと思えます。同時に本年 7 月の豪雨で岡山、広島、愛媛等で、また大阪府北部地震と台風 21 号により近畿地方でもまだ多くの方が困難に直面しているということも忘れず、可能なことがあれば復興へ協力したいものです。